

2018 年度 神戸大学男女共同参画推進室 ユネスコチェアサマープログラム 感想・報告書
 2018 Kobe University Gender Equality Office UNESCO Chair Summer Program Reflection Report

学部・研究科 Faculty/School	学科・コース Course
国際人間科学部	環境共生学科

(1) 見たこと/What you saw; (2) 考えたこと/What you thought; (3) 感じたこと/What you felt
(4)改善点/Improvement
(1) メラピ火山噴火の被災地における砂防ダムやその隣に当初のままと思われる壊れた家々、砂防ダム内で農業を営む人々。海岸付近の緊急避難場所とそこからみた大波をうつ海。災害時のボランティアの方々に による日常的なもので作った救急用具とその使い方。メラピ火山の活動モニター装置。簡素な避難所。資料館で の、人の手だけが灰からでた写真。(2) メラピ火山周辺の被災地に未だに住み続ける人と移住した人の違いは 何だろう。メラピの豊かな自然が昔から人々にも多くの恩恵をもたらしてきたことには納得するが、あれだけ 活発な活動を続けるメラピのふもとに住み続けるのは当然ながらリスクもあって彼らはそれを経験したはずな のに。生き残ったからこそなんとかかなと思っているのだろうか。火山灰によってより質の高い土壌となって 農業者にとって絶好の土地となったからと聞いたが、その価値は当事の恐怖感を超えて彼らをそこに留まらせ るほどなのだろうか。そこにはやはり故郷への思慕があるのだろうか。逆に移住した人々らには故郷への思慕 は少なかったのか。恐怖がそれらを上回ったのだろうか。政府の対応は両者の間で異なっていて、移住できた 人々らには手厚い補償があったからだろうか。逆に移住しなかった人々らはしなかったのではなく、できなか ったからではなかろうか。定住を決意(?)した人々らと移住を決意(?)した人々らの境界は心理的に、経済 的に、また社会的に複雑な要因が絡み合っているのだらうと思った。インタビューを通じて避難所では男性が パトロンとして警備すると聞いたが、それだけ災害時にはやはり犯罪が起りやすくそれは日本でも同じで支 え合いも沢山ある中で悲しい人間の性なのかなと思った、またそういった災害時には彼らの宗教観すらも超え ることがあるのだなとも思った。さらにジェンダーの観点から、どうしてこのときは男性がパトロンの役割を 担う必要があるのだろうか、女性でもいいじゃないか、職業としての警備員や警察官だったら男女の機会均等 だとかいう呪文を唱えているのにもおもった。生まれながらの性差がジェンダーイシューになる境界っても のすごく曖昧なもので、災害時には一瞬だけその人を覆い隠す経済力も社会的ステータスも意味を失って人間 が表れやすくなって、ある意味平等になるからこそ、こういった視点が見えてくるのだらうと思った。
(3)ボロブドゥール遺跡やプランバナン寺院へいったときに観光客の写真意識が過度だと感じた。一部の観光客 にとっては写真を撮ることが最大の目的・関心のように見え、少なくともこういった場所を保存するに至った 想いとは異なっていて、もはや世界遺産に歴史の深さなどは重要ではないのでは、と感じるほどであった。SNS

<p>の普及がこういった意識を加速させたのかもしれない。また途上国にある世界遺産の周辺には多くの零細商業者や物乞いがいるが、彼らにとってはボロブドゥール遺跡やプランバナン寺院はどうでもよく、そこに集まる（お金を落としてくれる）観光客にしか関心がないのではないか、それはまた世界遺産の存在を歪めかねなくて残念に感じた。インタビューを通じて、政府の手厚い補償は被災後の生活に安心感・満足感を与えている一方で、なんら個人的な災害対策は行っていない点ではやはり政府への依存・防災意識等の低下に寄与して彼自身からもそんなに防災意識が高いとは感じなかった。(4)最も改善が必要だと思う点は滞在期間中のフィードバックの時間。多くの情報や思考を各人が得ているはずで、ほぼ毎日14時、15時までにはプログラムが終わっていたにも関わらず、全体でそれらを共有して考えを深める時間が少なかったのがもったいなかったと強く思う。学生の宿泊先と先生方の宿泊先が少し離れていたのでもしづらいところはあったが、ディナーももっとみんなで食べて話す時間が欲しかった。クロージングセレモニーが内容の少なさに少し寂しかった。インドネシアや台湾からの文化パフォーマンスも見たかった。</p>
<p>本当に学び多いプログラムでした。先生方、お疲れさまでした。</p>